遊廓に生きるたくましい女たち

― 松村喬子「地獄の反逆者」（一九二九）とアクチュアリティ ―

山家 悠平

はじめに

名古屋中村遊廓栄楼の一室、長火鉢のまえに座って歌子は考える。

あそこの楼主は娼妓にとてもやさしいと云ったところで、やっぱり、上手に働かせて少しでも多く搾ろうとする気持ちに変りはない。それよりか、みんなで気を揃えて、ここの主人に、悪いところだらけのこの家の風習や、規則を、私等にも都合の好い様になおしてもらった方が、よいのじゃあるまいか。皆で心を一致さえすれば、必ず主人の方でも、いやとは云うまいから(1)

一九二九年四月に『女人芸術』誌上に掲載された、「地獄の反逆者＝人生記録＝」（以下、地獄の反逆者）の冒頭の場面である。同楼で働く歌子が思い描いているのは、遊廓のなかで娼妓たちが団結して楼主に要求をつきつけるという直接行動のイメージである。それから歌子は同僚たちの顔を想像し、だれにそのことを相談するべきか思いをめぐらせる。

この小説が書かれた一九二〇年代後半、日本の遊廓を取り巻く社会的な状況はめまぐるしく変化していた。女性や子どもの人身売買禁止を求める国際的な論調の高まりのなかで、日本政府は一九二五年一〇月に「婦人及児童の売買禁止に関する国際条約」を留保条件付きながら調印・批准し、国内では公娼制度の廃止を求める廃娼運動が戦前の最高揚期をむかえた(2)。一九二六年五月に全国警察部長会議で発表された「遊廓の待遇改善」という新方針に後押しされるように、遊廓からの集団逃走やストライキが多発した(3)。この小説の書き手である松村喬子も、そのような状況のなかで、一九二六年九月に遊廓から逃走し自由廃業(4)した娼妓のひとりだった。

松村よりも数ヶ月早く吉原遊廓から逃走した森光子（春駒）が、手記『光明に芽ぐむ日　初見世から脱出まで』（一九二六年）を刊行したのと同じように、松村も遊廓における体験をまとめ、連載という形で『女人芸術』誌上に発表した。ただし、同じ遊廓を描いた作品であっても、日記をリライトした告白物というスタイルで書かれた森の本と大きく異なっていたのは、「歌子」という主人公を中心にした三人称で叙述される物語であったという点である。

これまでの松村についての研究は、経歴や活動の紹介にとどまるもので、小説「地獄の反逆者」には、ほとんど注意がむけられてこなかった(5)。当時、遊廓や売春をテーマにした小説自体は、伊東憲『地獄の出来事』（一九二三年）や、葉山嘉樹「淫売婦」（一九二五年）などめずらしくなかったが、体験を重視するそれらのプロレタリア文学のなかでも、実際に遊廓という環境を生き抜いた女性が遊廓を描いた小説はほかに見当たらない。詳しくは本論で述べるが、「地獄の反逆者」はただの体験記ではなく、当事者の視点からの状況改善のイメージが小説の技法で描きこまれた文学作品である。

そこで本稿では、現在明らかになっている松村の足取りを概観した上で、松村が「地獄の反逆者」という作品を通して、なにを描き出そうとしていたのか、遊廓で過ごした時間を歌子という主人公の視点から再び語り直すことにはどのような意味があったのか、ていねいにみていきたい。

一、松村喬子のたどった道

（一）遊廓を離れるまで

松村喬子の写真は、遊廓からの逃走を報じる新聞記事をのぞいて現在三枚を国会図書館所蔵の史料のなかに確認することができる。そのうちの一枚は、一九二九年六月二二日、雑誌『女人芸術』の創刊一周年記念講演会の日に、小石川植物園で撮影された。雑誌創刊者の長谷川時雨、神近市子、林芙美子といったそうそうたる顔ぶれにならんで、松村は少し愛嬌のある笑みを浮かべ、しかし目には強い光りをたたえて写っている（図1）。同じ場所で写真に写っている、松村と同じ無産婦人同盟の活動家であった堺（近藤）真柄がのちに「体験記で長谷川時雨氏の『女人芸術』に気を吐いた松村喬子」(6)と書き記しているように、あるいは松村にとって、元娼妓という肩書きを背負ってその場にいることは、ひとつの闘いであったのかもしれない。まず判明している範囲で、その『女人芸術』時代以前の松村の足取りをみていくことにしたい。

図1　『女人芸術』1929年8月号から。松村は前列右から5人目。

松村の遊廓からの逃走を伝える『名古屋新聞』（一九二六年九月一三日）はそのときの年齢を二七歳と報じており、そこから考えると一九〇〇年頃の生まれであろう。同記事によると出身は大阪西成郡、三女として生まれ、高等女学校を二年で中退し、大阪の遊廓で働き始めたという。一九二五年に中央職業紹介事務局が東京の娼妓五一五二名を対象に行なった調査を参考にすると、高等女学校就学者は三一名（〇・六％。卒業者はいない）しかいないので、松村は遊廓で働く娼妓たちのなかではきわめて高学歴であった[7]。「大阪難波遊廓にあって革命婦人と歌われ共産党事件の例の荒畑寒村氏らと交わっていた」[8]とも同記事は報じている。母親の病気が悪化し、追借金が必要になったため、一九二四年一二月に、名古屋の徳栄楼に鞍替えする。それまでの借金に新たに徳栄楼からの借金が加算され、前借金は三五〇〇円に膨れあがった[9]。明細簿によると「体がすり減らされる迄に客を取った正月」の花代二七五円のうち、半分が楼主に渡り、その残りから前借金の利息一割五分、食費、税金、市価の三倍の正月用の着物代等が引かれ結局六〇円の追借金になっていたという[10]。逃走時の新聞記事には、借金の残りが三二〇〇円と記録されているので、もしその数字が正確ならば、徳栄楼で働き始めてから二年九ヶ月の間に三〇〇円しか返済できていない計算になる[11]。

松村の徳栄楼での生活に大きな影響を与える事件が立て続けに起こったのは、一九二六年のことである。二月の中ごろ、松村とも仲のいい、かるたという娼妓が逃走の際に大きなけがをしたことから、徳栄楼は四月二一日から七月二〇日まで三ヶ月の営業停止処分を受けた[12]。営業停止期間中の徳栄楼で、松村は吉原から逃走した森光子（春駒）の衝撃的な告白に出会うことになる。

春駒さんの告白が婦女界に出たと聞き、娼妓は本を買う自由も許されて居りませんから、親に頼んで、そこだけ切り取り、化粧品の箱の中に、効能書のようにねじ込んで送って貰ったのを、貪り読んで、外の娼妓等にも話して聞かせました。[13]

森はその記事のなかで、自らの生い立ちから、憧れであった歌人の柳原白蓮へ支援を求める手紙を書いて遊廓から逃走し、労働運動家の支援で廃業したことなどを詳細に語っていた。松村は、森の言葉のなかに、廃業への具体的なイメージをはっきりと見出したのであろう。「地獄の反逆者」では、その衝撃はよりドラマチックに描かれている。「歌子が客に送られた婦女界を手にして、それらを読んだ時の気持は、その後かるたに話す時、また新高に川柳に読ませる時に、話の下手な表情のない頬に、活々とした、熱があったといつも皆に冷やかされる位であった。それ程彼女はその春駒の手記を読んでショックを与えられた……川柳も泣いてこの記事に共鳴した。感激して、一句読んでは一言返して、高奴や小波を驚かせた」（五、一一八頁）。

その後、楼内の娼妓たちと相談し、自由廃業に関する情報を集めていた一九二六年八月頃、松村は遊廓病院に短期間の入院をすることになった。入院中に客から送られた『婦人公論』（一九二六年八月号）のなかの片山哲による論考「公娼廃止の善後策」が逃走の直接のきっかけになった[14]。その論考は、「公娼廃止問題も多年の努力と時勢の進運とによって、ここにどうやら実行期に入る曙光が見えてきた」[15]という現状認識から、政府による借金の肩代わりを論じる現実的な廃娼論である。松村は廃娼の正当性を明確に論じている片山が廃業の支援者になるのでは、という希望を持ったのだろう。片山の住所をたずねるために松村は「病室の女達が寝てから、婦人公論社へ手紙を書いた」[16]。片山から「懇切な優しい行き届いた返事が来て、それが導火線」[17]となり、九月六日深夜に松村は同僚三名と徳栄楼から脱走、東京の片山を訪ね、最終的に森の廃業を支援した労働運動家の岩内善作の助力で自由廃業を遂げている。

（二）労働運動のなかへ

廃業後、松村はしばらく片山のもとで暮らし、それから岩内の家に移った。その間、岩内の紹介で日暮里愛隣団の薬局に助手見習いとして務め、一九二七年

中に日本労農党の亀戸支部長をしていた社会活動家の小松原光太郎と結婚している[18]。同時期は、普通選挙法（一九二五年制定）を契機にした、無産政党の結党が相次いだ時期であり、各無産政党の傘下に誕生した無産婦人団体は、遊廓の女性たちに近い立場から公娼制度の廃止も綱領として掲げるようになった[19]。松村は日本労農党の指導下に誕生した全国婦人同盟に参加し、その後合同や改組を繰り返す組織のなかで継続して労働運動を続けている。

『婦女新聞』（一九二八年一月二二日）の記事には、この時期の松村と森に直接的な接点があったということが「松村さんは、今春駒の森光子さんと一緒に、娼妓の自覚を促すため、解りいいパンフレットを書いて、彼女等の許に送る計画を立てている」と記されている。その記事以外には松村が森とともに廃娼に取り組んだという記録はみつからなかったが、全国婦人同盟で松村が前述の堺真柄や織本（帯刀）貞代らと廃娼班に所属し、活動していたことは確かである[20]。また、同じ『婦女新聞』のなかに、「この程遊廓の経験を主として書いた本を脱稿した」とあり、そのタイトルも「地獄の反逆者」と紹介されていることから、廃業後比較的早い時期に原稿をまとめたようである。

そして、前述のように一九二九年四月から松村は、名古屋の中村遊廓栄楼の歌子を主人公とした小説「地獄の反逆者」の連載を『女人芸術』誌上で開始する。当時プロレタリア文学誌の色彩を強めつつあった『女人芸術』において、遊廓を生き抜いた経験を持つ松村は期待された書き手のひとりでもあった。たとえば、一九二九年四月号の後書きで、八木秋子は松村とはじめて出会った印象を「松村喬子さんの『地獄の反逆者』は人々の注意を惹くものと思う。四五日まえ喬子さんは遊びに来られたが中々しっかりとした感じの人だ……実際の体験の上にたって公娼廃止の叫びをあげたら、百千の議論よりも力強いことであろう」と述べ、松村の執筆へ期待を寄せている。

（三）『女人芸術』時代

『女人芸術』時代の松村を特徴づけるのは、「地獄の反逆者」の執筆と、それに続く講演活動への精力的な参加である。この時期は『女人芸術』の歴史のなかでも「もっとも華やかな時代」[21]にあたり、東京だけでなく全国で講演会が行なわれている。一九二九年六月二二日に日比谷音楽堂で開かれた『女人芸術』創刊一周年記念芸術祭では松村は二千人の聴衆をまえに「無産婦人と廃娼」という講演をしている。続けて一〇月一八日の秋季大講演会、一九三〇年一月二九日の名古屋講演会にも登壇した。

名古屋での講演については、初登壇した矢田津世子が「登壇されるや、満場は暫時拍手の鳴りも止まず。やがて静まるを待って氏のよく透る声は場内に反響する。氏にとっては、正に苦難の地であった名古屋、その名古屋に於て講演するのは泪ぐましいものがある事を推察して同様に胸が迫る」[22]と記している。矢田の記録にもあるように松村は演説が得意だったようで、ほかにもいくつか証言が残っている。たとえば、社会主義者の堺利彦は「喬子君は演説が一かど出来るし、それに又達筆で、組合の看板書きなど大てい引き受けている」[23]と述べ、平塚らいてうも一九三一年二月の全国婦選大会における松村の様子を「松村喬子さんの無産派を代表しての発言は、当日の異彩として注視されました……『これからすぐに議会に押し寄せようではないか』とアジをかけた瞬間、臨監の警官から中止命令が出たのでした」[24]と描写している。

そのように次第に活動の場所を広げていった松村だが、『女人芸術』とのかかわりは、一九三〇年七月号に連載の続編である「脱出―前出『地獄の反逆者』の綴目をなすもの―」を発表して以後沈黙し、翌一九三一年七月号に書かれた「組織されゆく自由労働者」が『女人芸術』への最後の寄稿となる。『女人芸術』は一九三二年六月号で終巻した。

その後、松村は労働運動を続けながら、遊廓についての文章を数篇発表した。しかし、「昭和八年中ニ於ケル社会運動ノ状況」（内務省警保局が社会運動の監視を目的として作成した内部資料）の組織図に記された、「社会大衆婦人同盟組織部長松村京子（ママ）」[25]という一九三三年一二月末の情報を最後に運動の表舞台から姿を消している。鈴木裕子編『日本女性運動資料集成　別巻　日本女性運動史人名事典』には、戦後に松村が堺（近藤）真柄を通して婦人有権者同盟にかかわりを持ったということ、その没年が一九九三年であるということが記述されている[26]。

二、当事者が遊廓を「描く」ということ

（一）物語のあらすじ

小説「地獄の反逆者」は、一九二六年九月に遊廓から脱出した松村が労働運動に参加する過程で執筆され、その後少し時間をおいて発表された作品である。一九二九年四月に開始された連載は、主人公の歌子が妓楼の一室で思案に

ふける場面（描写されるその後の出来事から一九二五年の冬頃）から脱出の前夜までを描き、一九二九年九月の連載第六回目で一旦終結した。本稿では、逃走までを描く最初の連載六回を取り上げる。

まず、「地獄の反逆者」の物語内容を簡単に紹介する。名古屋中村遊廓の本家栄楼の娼妓歌子は、あるとき楼のなかで楼主に忌み嫌われている病弱な娼妓かるたの部屋を見舞いに訪れる。そのことを楼主にきつく咎められた歌子は、働いても借金が減らない稼業にも、楼主にも反感を抱くようになる。楼主の木浦は、中村遊廓に新規参入した栄楼を一気に一流店にのしあげたやり手の商売人であるが、酒をのむと長時間娼妓に説教する癖があり、気に入らない娼妓に対しても冷酷であった(27)。そんな楼主に不満を持つ、新高、川柳、小波という娼妓たちと仲よくなった歌子は、次第に遊廓からの逃走の計画を具体的に考えるようになる。一方、かるたは歌子の助言に従って地元の笹島署に出頭し休業を訴えるがかなわなかったため、今度は楼の二階から飛び降り名古屋署に駈け込んだ。警察から楼主にきびしい説諭があるのでは、という歌子たちの期待もむなしく警察署長は娼妓たちを前に楼主を擁護する演説をする。かるたも廃業はかなわず、奈良の木辻遊廓に鞍替えさせられてしまう。楼に残された歌子は、無念の思いを抱きながら、新高、川柳、小波とともに必死の逃走を決行する――。

のちに松村が自叙伝として『中央公論臨時増刊「大衆雑誌」』（一九三二年八月号）に発表した文章（しかしそこでも歌子を主人公とした三人称で記述されているが）や、新聞記事を参照にすると、かるたの逃走や営業停止処分、森光子の手記との出会い、片山哲との手紙のやりとりなど、小説のなかで描かれる多くのできごとが実際の体験に基づいているのは確かである。なお、物語の舞台となる妓楼の名前は、実際に松村が働いた徳栄楼から「栄楼」へと小さな変更が行なわれている。

（二）決してあきらめないたくましい女たち

しかし、単純な事実の回想や記録というよりも、「地獄の反逆者」という作品を特徴付けているのは、なによりも小説的な技法に沿って展開される、登場人物たちの軽妙なやりとりである。登場する女性たちはきわめて個性的であり、そのバックグランドにいたるまで歌子の目線からていねいに描写されている。

最初に登場するのがかるたである。楼内で最もからだが弱く、楼主からは「家の毒虫」と蔑まれている。連載第二回目で登場する新高は、もと難波新地の芸妓であり、当時同じ大阪で働いていた歌子も評判をきいたことがあったという。新高きわめては波乱に満ちた人生を送っている。「芝居道楽」で役者に入れあげ、金を湯水のように使い、その後、客の博徒の妾として身請けされるが夫の博打での失敗や縄張り争いが原因で九州の私娼街へ流れ着き、あまりにひどい生活に「こんな位なら娼妓（公娼）の方がよい」（二、一〇〇頁）と若い抗夫と脱走を試みる。足抜け娼妓ということで国内では雇ってくれる妓楼がなく、最終的には台湾に渡り公娼になるが、そこから栄楼に引き抜かれた。楼内でもっとも反抗的な娼妓として描かれるのは、前橋出身のバルチザン小波である（パルチザンの誤記かと思われるが本稿中では原文のまま用いる）。「一番我ままもので主人でも誰でも、気に入らぬ事があれば、口答えする、くってかかる位のことはやったし、一度この客は金を持っているナと見れば、どんなにしても金をまきあげる、そんなこんなで、バルチザンと名をつけられたのだと自分で歌子に話したことがあった」（二、九八頁）。歌子たちのグループで一番若いのは川柳で、もと田舎の芸者であるという。歌子の表現では「娼妓としては一番禁物の情熱家」（二、一〇一頁）で、一度好きな男のために逃走を試みて失敗、楼主の怒りを買っている。

遊廓の日常は、歌子とそれらの同僚娼妓たちとの会話を中心に描かれる。たとえば、つぎの場面は、物語の後半、歌子に内緒で逃走したが警戒網に引っかかりあえなく連れ戻された新高と川柳とのやりとりである。

「非常線なんて、蜘蛛の巣と一緒だネ」

歌子が、話を聞いてそんなことを云ったら、すぐ川柳が聞き返した。

「なんでやネー、蜘蛛の巣とは？」

「だって、あんなものには大きなものはかからないのだもの、クモの巣だって、そうでしょう、大きな鳥や蝙蝠は、一つだって懸かりはしないわ、破れて切れてしまうのだもの、たまに木の葉の様なものか、蚊だとか蝿位なものしか蜘蛛の巣に懸かっているのはみたことがないわ、それと一しょで、大物は金の力で自由にしているし、大犯人は、懸からずに、小さい、コソ泥位が非常線には、関の山よ」

高奴は、如何にもと云った顔していた。

「ホンナラあたし等はコソドロか？」

川柳の声は頓狂な声で響いた。

「辛いから他へ住替させてくれと云ってもやってくれないし、それなら、も少し楽になる様にしてくれと云っても、やってくれないのだから、警察へ出て、真面目な商売をして、たとえ少しづつでも、借金は入れると云っても、それも許さないから、逃げる外なくて逃げたんだわ、それで借金はどうかして払いたいと思っていると云っても許されないのだもの」

歌子はまるで自分自身のことの様に憤慨した。

「ほんとうやナ」

二人共溜め息をついた。（五、一二〇頁）

逃走の失敗という深刻な状況にあっても、会話の中心には常にユーモアと共感がある。足抜けの失敗というと、暴力や鞍替えといった楼主による懲罰が想像されるが、小説のなかでは「一つでも娼妓に手をかけたら、借金は棒引きになると云うことだけは、いかに興奮していても忘れていなかった」（五、一二一頁）と、楼主が気持ちを静めながらふたりに説諭する場面が描かれている。それどころか新高と川柳は逃走の失敗以降「自暴自棄の誰にも恐れない、どうなと勝手にしやあがれと云う態度」（五、一二〇頁）で説教をする楼主に対して「二人共、涼しい顔をしている、そして、あべこべに、口返答をする」（五、一二一頁）という。

そのように松村が描く遊廓という空間では、楼主が絶対的な権力を持ちつつも、そこで生きる娼妓は、ただおとなしく従っているわけではない。娼妓たちの会話のなかでは、たとえ一時的なものにせよ、楼主の権力は否定され、共有された不満は新たな連帯の土壌になる。バラエティに富んだ娼妓たちの描写を通して松村が読み手に提示するのは、決して弱々しくも儚くもない、遊廓の不条理な搾取に憤り、抗おうとする女性たちの姿である。

（三）悲しみだけでなく

歌子のまなざしはきわめて冷静に、遊廓での仕事を「残酷な労働」（一、五六頁）ととらえている。しかし、一方で「地獄の反逆者」が外側から遊廓を描いた作品と一線を画するのは、哀しみや苦しみだけではない生活の諸層が当事者の視点から描き出されているところである。たとえば、連載二回目には、歌子の恋人として水谷という帝大生が登楼する場面がある。

海水浴で真黒になった健康そうな皮膚に白い水兵の着る様な服でニコニコしながら、仲居の話を聞いていた。歌子の顔を見るなり

「しばらく、御ぶさた致しました」

丁ねいに叩頭した。その言葉は客が娼妓に対する言葉とはちがっていた。

「おかえんなさい、避暑に行っていらっしゃったのやですってね、いつ帰っていらっしゃいましたの」

歌子が返じもきかない中に仲居が、言葉を入れた。

「歌子さん、もうお泊りにしといてもよろしやろ、もう十二時すぎてますから、十円にしてもらっときますわ」

歌子は水谷を見た。水谷のくせで、すぐ財布を歌子に渡すのであった。渡しながら歌子に答えた。

「今日一寸帰ってきたの、そして兄さんに許しを受けてきたの」

「そう、でしたら泊まりにして好いのネー」

「じゃおしげさん、泊りにしておいて下さい」

おしげさんはいそいそと去った。

「洋ちゃん、僕今夜、ビールが飲みたいナー」

子供が欲しいものをねだる時の様にせがんだ。歌子の本名は洋子と云った。いつも歌子に子供の様にあまえるのが、歌子は何となく可愛いと思った。（二、一〇四頁）

水谷は小説全編を通して唯一登場する客であり、その水谷に対する歌子の感情はきわめて好意的なものとして描かれている。「歌子は水谷に逢ってる時だけ娼妓対客としての感じが少しも起こらなかった、それが一番嬉しい」（二、一〇五頁）、「他のどの男より一等好きであった……無邪気なこの青年は歌子の一番可愛い青年でなければならなかった」（二、一〇五頁）と、水谷との関係を歌子が、遊廓における「残酷な労働」とは異なるものとしてとらえている様子が繰り返し描写される。

もっとも象徴的なのは、水谷が登場する場面で歌子の本名という説明がなされている「洋子」という名前である。小説のなかで歌子の本名とされる「洋子」は、実際には松村が徳栄楼で働いていたときの源氏名である。連載のなかで、水谷が登場するのはそのときだけであり、歌子を「洋ちゃん」と呼ぶひと

もその後登場しない。ここでは小説の書き手としての松村と、描き出されるキャラクターである歌子が、実際に遊廓のなかに生きた「洋子」という名前によって一瞬だけつながれるのである。歌子、あるいは「洋子」の水谷への愛着はつぎの場面でも描かれている。

歌子は立ち上がって、普通の客に出すゆかたではない、水谷にと思って拵えておいた浴衣を箪笥から出した。すなおに立って、服を脱いだ水谷の、若々しい運動に鍛えられた丈夫そうな体の後から、ゆかたを着せかけた。

「一寸帰りにかるたさんを見舞ってやりましょうねー」

水谷は返事の代わりに、一つ大きくうなづいた。彼としては勇気を出して一生懸命でかるたの室へ入った。（二、一〇六頁）

このように松村は、歌子の視線を通して、水谷に着せる浴衣のことから、丈夫そうな裸の身体の印象までていねいに描写している。歌子にうながされて水谷は、歌子の親友であるかるたの部屋を訪れ、病気になってもやめることができないという遊廓の過酷な現実に、はじめて接することになる。

これらの水谷に関する一連のエピソードを通して描かれるのは、歌子という主人公のきわめて人間的な感情のありかたである。楼主やその取り巻き娼妓たちのかるたに対する扱いに強い憤りを覚える歌子は、遊廓という空間を嫌悪しつつも、水谷や先にみた新高や小波をはじめとする仲のいい同僚たちには強い愛着を示す。遊廓で働くことを「機械的な労務」（二、一〇八頁）と半ば絶望しながらも、あるいはそうであるがゆえに、水谷が訪れるときを心待ちにし、かるたの置かれた状況の残酷さや稼業への疑問も隠さず打ち明ける。そこでは、遊廓で生きるという経験が「悲劇」として単純化されることなく、そこに生きる歌子というひとりの人間の言葉や行為を通して、鮮やかに描き出されている。

三、まだ見ぬ娼妓たちにむけて

（一）逃走マニュアルとして

かるたとの出会いや水谷との関係といった日常を描いていた物語は、かるたの内的独白から始まる連載三回目を境に急速に動き出す。かるたは歌子のすすめで警察署に手紙を書き、呼び出しを待って出頭するが、休業が認められなかったので今度は二階の窓から飛び降りて警察署に駈け込んだ。かるたが足に大けがをしたことで、栄楼に警察からの調査が入ることになる。その状況を、歌子はつぎのように説明する。

新聞は大きく栄楼の娼妓虐待として、栄楼の写真まで出た。新聞は皆娼妓の同情で埋まっていた……ちょうどその頃の警保局長松村光三氏[28]の、娼妓に同情した記事も毎日新聞に出て、楼主達は大ろうばいの時であった。（六、一〇五頁）

遊廓のなかにいても歌子は新聞を通して、遊廓や娼妓にむけられる社会的な視線を敏感に読み取っている。それはちょうど森光子が『光明に芽ぐむ日　初見世から脱出まで』のなかで描写した、吉原遊廓の長金花のなかで娼妓たちが自由廃業を報じる新聞記事をめぐって言葉を交わしている場面とも重なり合う[29]。

連載四回目以降、逃走にむかう物語の流れのなかで、場面の構成やキャラクターたちの会話に、それまでとは異なる要素が目立つようになる。たとえば、先にふれた新高と川柳の逃走のエピソードのなかで、歌子は新高の語った内容をつぎのように要約して語りなおしている。

如何にも残念そうな顔で高奴（新高）は、逃げる時には、チャンと一番目ざとい笑福に酒をのませて、酔いつぶして二人は出たことや、まっすぐ一本筋の大門迄を行けば見つかるといけないと思って……遠まわりして、ようやく自動車に乗ったことも名古屋駅ではすぐ追手がついた時一番不利だからと云うので、郡部へ二三日かくれて様子をさぐってからにしようと……（五、一二〇頁）

ここには小説の展開とはあまり関係のない過剰なまでの具体性がある。遊廓から逃走するときに車をつかまえる場所や下りる場所の注意など、ここで説明されていることは、逃走マニュアルとでもいうべき内容になっている。おそらくこの描写で意識されている読み手は、実際に遊廓のなかにいて逃走を考える娼妓たちだろう。松村自身、楼内で新聞や森の手記を読み、片山哲の論考に導かれるように逃走を実行したのであり、書き手にまわったときかつての自分の

状況を想起したことはまずまちがいない(30)。

そういった具体的な逃走方法に関する情報だけでなく、遊廓を取り巻く社会的な状況についても、終盤に近づくにつれ多く書きこまれている。かるたの廃業が失敗して楼内の行動的な娼妓たちが意気消沈している場面で、歌子は新聞記事や雑誌を通して得た情報を次々と楼内の娼妓たちに語り聞かせる。

> 毎日新聞には続いて松村警保局長の意見が発表されて、娼妓は大部分その新聞の記事をよろこんで、歌子の読んで聞かすのをジットおとなしく聞いた……それから婦女界には吉原から目覚めて勇敢に飛び出した春駒の手記さえのせられている……かるたは自分のことのように喜んだ。力強く歌子にも誓った。「歌子さん、少し足さえ自由になれば、私もやります、今度は決してあなた方にご迷惑はかけません、それ迄、どうか今迄のご迷惑ついでに、みすてないで下さい」。（五、一一八頁）

多くの場面は歌子が新高や川柳に語りかける形で描かれているが、歌子は小説の読み手である現実世界の娼妓たちにも、取り入れた知識をやさしい話し言葉で伝える役割を担っているのである。「娼妓は本を買う自由もない」と『婦女新聞』（一九二八年一月二二日）の取材のなかで答えているように、当時の遊廓のなかで、自由廃業や逃走をめぐる実際的な情報を得ることの難しさを松村は熟知していたはずである。だからこそ、逃走へと次第に加速する物語の展開にあわせて、状況を切り拓くための知識を集中的に書き込んだのであろう。

（二）遊廓の内側からの変革を想像する

いま述べたこととも関連して、この作品が一人称による体験記ではなく、小説として書かれたことによって生まれた可能性について、最後に簡単にふれたい。松村以前に、遊廓の女性が書いた体験記は、大正初期の和田芳子『遊女物語』（一九一三年）を嚆矢として、前述の春駒の手記にいたるまで、すべて「妾」「私」といった一人称を用いて書かれている。そのなかの語りはそのまま書き手が体験した事実として読まれることになる。

それらの遊廓に関する当事者の告白という形式から離れて三人称の小説を選んだことで、松村は、自分が実際に体験した出来事を告白するという拘束から離れて、主人公の歌子の視点を中心とした新しい世界を描き出すことが可能になった。徳栄楼は「栄楼」になり、洋子は歌子になる。たとえ、松村自身の体験が下敷きになっていたとしても、あくまで歌子という主人公の生きる遊廓をめぐる物語になる。

そのような視点から物語をとらえると、主人公に託されていたのは、松村の理想であり希望である。小説のなかで歌子は、一貫して溌剌としており、行動的である。楼主の取り巻き娼妓の小町が部屋の外に来たことに気づいたかるたが、告げ口をされると歌子に迷惑になるから、と心配すると歌子は「いいわ、かまわないわ、だって朋輩同士が見舞いにくるのに、何が悪いことあるもんですか、若しそんなことで何か云えば、私だって云ってやりますよ」（一、五五頁）と答える。逃走に失敗した新高や川柳をまえにして、しばらくは我慢して機をうかがうように、とアドバイスし、つぎこそは「決してこんなヘマをやらない様にしましょうね」（五、一二〇頁）と励ましてもいる。

もっとも象徴的な場面は、連載の最終話に登場する。歌子は部屋にいる娼妓たちにむかって自覚をうながす、つぎのような長い演説をする。

> 皆、考えましょう。少しは強くなって下さい。いつ迄もそんな弱々しいことではいけません。だから悪い処や気に入らぬ処はどんどんとそれは一人ではだめです、皆が力を合わせなければならないんですが、お父さんの処へ云っていくのです。そして、悪い処はなおしてもらう様にするのです、今だってたくさん悪い処はある。
> 一、借金が少しも減らないから、利子は取らないこと
> 二、病気の時は絶対に客を取らさないこと……
> 三、病気の時はすぐ医者を間に合わしてくれること
> 四、月々の売上は月々ハッキリと書きあげてどれだけ入用でどれだけ借金へ繰り入れと明記してくれること
> 五、売れる人も売れない人も時の運だから、差別しないこと
> 六、住替したい人は自由に本人の意志に任せること
> 七、本や新聞は自由に読ませること
> 八、月に二三回度位、外出を許すこと
> 九、重い病気の時は根本的の治療をさせてくれること

十、親の死報に接した時は心よく親元へかえすこと
等、まだまだ多くさんありますがそれだけでも一時も早く皆で頼めばキットその中の五や六つは聞入れます。（六、一〇一頁）

演説は最終回の八頁のうち二頁に渡って展開されている。楼主に対する具体的な要求事項を提示し、直接行動をうながすこの演説の場面は、おそらくあり得たかもしれない可能性を描いたフィクションである。というのも、これからまさに逃走しようという人間が、遊廓の内側からの行動をうながすのは不誠実であり、それ以上に娼妓を集めて演説をするという目立つ行為は、逃走という目的と矛盾するからである。

しかし、この演説が実際に行なわれたかどうかということとはかかわりなく、ここに書き込まれているのは、娼妓たちが団結し行動することで、自分たちの手で状況を改善していくことができるという明確なメッセージである。歌子の言葉のなかで、遊廓のなかに生きる女性たちは、状況変革の主体としてとらえられている。そして、そのメッセージは、遊廓のなかに生きる娼妓たちが読むことを念頭において書かれている。そうでなければ、物語の進行と直接関係もなく、遊廓の外側では意味を持たない楼主に対する要求事項を、ここまで具体的に書き出す必要がないからである。

松村が同時期に全盛期をむかえていたプロレタリア文学を意識していたことは否定できないが（たとえば小林多喜二の「蟹工船」は、一九二九年の『戦旗』五、六月号に掲載）、この場面を通して読み取ることができるのは、最終的に逃走という形で遊廓での生活を終わらせた松村にとって、小説という形式で文章を書くことは、単に過去の生活を回想するだけではなく、圧倒的な抑圧のなかで奪われた自分自身の時間を「生き直し」、小説の主人公の行為や言葉によって現在の読み手に語りかけるというきわめてアクチュアルな作業であったということである。

その後、一九三〇年代に入って、昭和恐慌下で日本全国の遊廓で状況改善を求めるストライキが頻発する[31]。小説の栄楼のなかで歌子が同僚娼妓たちに語りかけていたことが、現実になったのである。それらのストライキで掲げられた要求事項の多くは、小説のなかで歌子が示した要求と重なり合うものであった[32]。そのことは、松村が描き出した小説の世界が、当事者の生活のリアリティに根ざしていたという証左になるのと同時に、「地獄の反逆者」のなかの歌子のメッセージが、実際の遊廓のなかでも十分に意味を持つものであったことを示している。

おわりに

「地獄の反逆者」の連載開始から二ヶ月後の『女人芸術』一九二九年六月号には、遊廓のなかの読者からの反応を喜ぶ松村自身が書いたという手紙が掲載された。

実は先生に喜んで頂きたいことがあります。それは名古屋の私の居た楼の娼妓から手紙が来たのです。しかも芝の日労党内として。
それには名古屋で「お客が持って来てくれた女人芸術という本に姉ちゃんの小説が出て居て、何度も何度もお客様に読んでもらったのです。ほんとうにそうですわ、姉ちゃんの処へ一日も早く行きたいですから今そのすきを見て居るのです。行く時は電報を打ちますからどうぞお願いします」と書いてありました。
私ほんとうに先生にもお礼申し上げます。女人芸術に私のまずい文が出た事によって、一人の娼妓でも出られたら、私どんなに喜しい事でしょう。もう涙が出て……[33]

手紙のなかで松村が先生と呼んでいるのは長谷川時雨のことであろう。松村を姉と慕う一人の娼妓が脱出の決意をして手紙を送ってきたというこのエピソードは、翌月号へのその娼妓の手紙の文面の掲載という形で裏付けられている。「地獄の反逆者」で歌子が外からの情報を同僚たちと共有していったように、遊廓のなかにも松村のメッセージが届いたのである。

みてきたように、「地獄の反逆者」は、一九二〇年代の廃娼世論の高揚を背景に遊廓を抜け出した松村が、歌子という架空の人物を生み出すことで再び遊廓のなかに「入り」、その場所から歌子の言葉や行動を通して、遊廓のなかに生きる女性たちに語りかけるという、強いアクチュアリティを持った作品である。小説のなかでは、当事者の視点から豊かな人間関係のコミュニティが描かれ、一人ひとりの娼妓はそれぞれ名前を持ち、魅力的な存在として登場する。楼主への怒りや警察への憤りを通して、歌子とその仲間たちは強く結束する。酒

をのんで娼妓をなじる楼主のいやらしさも描かれるが、その楼主を小馬鹿にする新高や川柳たちの痛快な掛け合いも描かれる。営業停止処分になったあとの栄楼からほかの揚屋に一時的に移ったときのことを「栄楼のおかみや、主人の居ない気楽さに、皆、うきうきとして遊び暮した」（五、一一八頁）とも書く。つまり、遊廓が楼主の強い管理と搾取のもとにあるストレスフルな空間であるということは大前提だが、そこに生きる娼妓たちの怒りだけでなく、日常における喜びも「地獄の反逆者」にはしっかりと描かれている。たとえ社会的には否定すべき経験として考えられている、遊廓のなかで過ごした時間も、歌子にとって、「洋子」にとって、二十代前半のかけがえのない時間なのである。そういった生きた人間としての娼妓の生が、当事者の立場から深い愛情とともに書き込まれているところにこそ、「地獄の反逆者」の真価がある。

一方で、その当事者がとらえる遊廓の日常と、遊廓の外側に生きる人たちが娼妓たちに抱くイメージに大きなずれがあったであろうことも想像に難くない。八木秋子は『女人芸術』の後書きのなかで、松村に好意を示しながらも「娼妓の生活を送って逃れてきただけに、永い苦しみの影が顔にうかんでいた」(34)と書き、『婦女新聞』の記者は松村の印象を「その血色の悪さに、虐げられた過去の生活が偲ばれた」(35)と描写する。八木が松村に会ったのは、廃業からすでに三年近くが過ぎた後であるにもかかわらず、顔には苦しみの影が浮かんでいるというのだ。

そのように、かつて売春をして生きた女性に「期待」されるものが悲劇や残酷な体験談だとすると、松村はおそらくは意識的にその「期待」を裏切るような形で娼妓たちを描き出した。「地獄の反逆者」には、ただの弱い娼妓も、同情を求める犠牲者も出てこない。かるたは病気を抱えているが最後まで廃業をあきらめないし、逃走に失敗して連れ戻された新高は「いや、とてもうまくやったのやけど、夜警に引っかかったのでナー」（五、一一九頁）と悪びれもせず歌子にいう。歌子も含めて松村が描写する娼妓たちは、なみなみならぬ強い怒りをかかえてはいるが、世を儚んではいない。積極的に情報を集め、虎視眈々と逃げる機会を探っている。松村は、そのようなたくましい、ときにはしたたかな人間としての娼妓たちの姿を描きだすことを通して、娼妓や元娼妓に投げかけられる強いスティグマとも、精一杯闘っていたのだと思えてならない。たとえ遊廓という「地獄」を抜け出しても、「哀れな犠牲者」というイメージを与えられ続けるとしたら、それはまた新たな地獄にほかならないのだから。「地獄の反逆者」とはかつて遊廓を生きた「洋子」やその仲間の娼妓たちだけを意味しているのではなく、元娼妓という現実を生き続けなければならない松村自身のことも指しているのである。

引用・参考文献（五十音順）

伊東憲『地獄の出来事』、総文社、一九二三年。
伊能秀明「資料　阿部定の訊問調書」、『明治大学博物館研究報告』第九号、二〇〇四年。
今中保子『日本近代女性運動史――広島県を中心にして――』、渓水社、二〇〇二年。
尾形明子『女人芸術の人びと』、ドメス出版、一九八一年。
小野沢あかね「『婦女新聞』と廃娼運動」、『婦女新聞』を読む会編『「婦女新聞」と女性の近代』、不二出版、一九九七年。
片山哲「公娼廃止の善後策」、『婦人公論』、一九二六年八月号。
――――『回顧と展望』、東洋経済新報社、一九六七年。
近藤真柄『わたしの回想記（下巻）赤瀾会とわたし』、ドメス出版、一九八一年。
堺利彦「私の見た婦人闘士」、『婦人公論』、一九三〇年一二月号＝「私の見た婦人闘士」、鈴木裕子編『堺利彦女性論集』、三一書房、一九八三年。
鈴木裕子編・解説『日本女性運動資料集成　第五巻　生活・労働Ⅱ　無産婦人運動と労働運動の高揚』、不二出版、一九九三年。
――――『日本女性運動資料集成　第六巻　生活・労働Ⅲ　一五年戦争と女性労働者・無産婦人運動』、不二出版、一九九三年。
――――『日本女性運動資料集成　別巻　日本女性運動史人名事典』、不二出版、一九九八年。
中央職業紹介事務局『芸娼妓酌婦紹介業に関する調査』、一九二六年。
長谷川時雨『美人論』、東京社、一九一八年。
早川紀代『植民地と戦争責任』、吉川弘文館、二〇〇五年。
葉山嘉樹「淫売婦」、『文芸戦線』、一九二五年一一月号＝『淫売婦』、春陽堂、一九二六年。
平塚らいてう「昭和婦人解放運動史――太平洋戦争に突入するまで」、『女性改

造』、一九五一年五月八日号＝平塚らいてう著作集編集委員会編『平塚らいてう著作集　第七巻』、大月書店、一九八四年。
藤目ゆき『性の歴史学』、不二出版、一九九七年。
松村喬子「地獄の反逆者＝人生記録＝」（一～六）、『女人芸術』、一九二九年四月号～一九二九年九月号。
――「続地獄の反逆者」、『女人芸術』、一九三〇年二月号。
――「長屋の選挙気分」、『女人芸術』、一九三〇年四月号。
――「脱出――前出『地獄の反逆者』の綴目をなすもの――」、『女人芸術』一九三〇年七月号。
――「組織されゆく自由労働者」、『女人芸術』、一九三一年七月号。
――「生地獄『廓』を抜けた私　自叙伝―自廃から婦人闘士へ」、『中央公論臨時増刊「大衆雑誌」』、一九三二年八月号。
――「『籠の鳥』の解放問題について」、『婦選』、一九三三年六月号。
村崎しづ子『千束町より』、鹿野書店、一九一三年。
森光子「廓を脱出して白蓮夫人に救わるるまで」、『婦女界』、一九二六年七月号。
――『光明に芽ぐむ日　初見世から脱出まで』、文化生活研究会、一九二六年。
――『春駒日記』、文化生活研究会、一九二七年。
八木秋子「編集後記」、『女人芸術』、一九二九年四月号。
矢田津世子「女人芸術名古屋講演記」、『女人芸術』、一九三〇年三月号。
山家悠平『遊廓のストライキ』、共和国、二〇一五年。
――「ものを読む娼妓たち――森光子と松村喬子の作品に描かれる『読書』を中心に」、『女性学年報』、第三八号、二〇一七年。
渡辺悦次・鈴木裕子編『たたかいに生きて――戦前婦人労働運動への証言――』、ドメス出版、一九八〇年。
和田芳子『遊女物語』、文明堂、一九一三年。

註

(1) 松村喬子「地獄の反逆者」、『女人芸術』、一九二九年四月号、五三頁。以後、「地獄の反逆者」からの引用は、連載番号（一～六）と『女人芸術』掲載時の頁数のみを本文に表記する。引用にあたって、新字・新かなで統一し、代名詞・副詞等に用いられている一部の漢字をかなに改めた。送りがなは原則として原文のままとし、適宜句読点を整理した。

(2) 小野沢あかね「『婦女新聞』と廃娼運動」、『婦女新聞』を読む会編『「婦女新聞」と女性の近代』、不二出版、一九九七年、二一九頁。

(3) 詳しくは、山家悠平『遊廓のストライキ　女性たちの二〇世紀・序説』、共和国、二〇一五年、一二八―一三四頁参照。

(4) 自らの意志で定められた年期の途中で廃業すること。

(5) 松村に言及した研究としては、渡辺悦次・鈴木裕子編『たたかいに生きて――戦前婦人労働運動への証言――』、ドメス出版、一九八〇年、一五七、一五八頁、尾形明子『「女人芸術」の世界　長谷川時雨とその周辺』、ドメス出版、一九八〇年、六五頁、今中保子『日本近代女性運動史――広島県を中心にして――』、渓水社、二〇〇二年、一六四頁等がある。

(6) 近藤真柄『わたしの回想記（下巻）赤瀾会とわたし』、ドメス出版、一九八一年、一五五頁。

(7) 中央職業紹介事務局『芸娼妓酌婦紹介業に関する調査』、一九二六年、七二、七三頁。

(8) 『名古屋新聞』一九二六年九月一三日。難波遊廓は火災による甚大な被害のため一九一二年で廃止されており、南地五花街の難波新地と推察される。また荒畑寒村とのつながりについては、史料に確認ができていない。

(9) 松村喬子「生地獄『廓』を抜けた私　自叙伝―自廃から婦人闘士へ」、『中央公論臨時増刊「大衆雑誌」』、一九三二年八月号、一三二頁。

(10) 松村喬子前掲「生地獄『廓』を抜けた私　自叙伝―自廃から婦人闘士へ」、一三三頁。

(11) のちに「地獄の反逆者」のなかで描写される遊廓には、実際に三十代、四十代の娼妓も複数名存在しているので、松村が逃走に活路を見出したのも頷ける。ただし、それが遊廓の一般的な状況であったかというとそうではなく、先述の中央職業事務局の調査によると、東京府下の娼妓五一五二名中一八歳から二八歳までが四六二五名（九〇％）を占めており、四〇歳以上は六名しかいないので、むしろ徳栄楼における搾取と長期間の拘束が際立っていたといえる。

(12) 『名古屋新聞』一九二六年九月一三日。

(13)「公娼より廃娼運動へ――自廃した松村喬子さんを訪う――」、『婦女新聞』、一九二八年一月二二日。

(14)戦後に内閣総理大臣（一九四七年五月二四日―一九四八年三月一〇日）を務めることになる片山哲は当時、無産政党結党にむけて力を注いでおり、その後一九二六年一二月一五日には社会大衆党を結成、書記長となっている（片山哲『回顧と展望』、東洋経済新報社、一九六七年、一三三―一四五頁）。

(15)片山哲「公娼廃止の善後策」、『婦人公論』、一九二六年八月号、三七頁。

(16)松村喬子前掲「生地獄『廓』を抜けた私　自叙伝―自廃から婦人闘士へ」、一三八頁。

(17)同前。

(18)『読売新聞』一九二九年八月二二日。のちに小松原の親軍部政党への転向を理由として一九三二年に離婚している。

(19)山家悠平前掲書、一八六頁。

(20)尾形明子前掲書、六五頁。

(21)尾形明子『女人芸術の人びと』、ドメス出版、一九八一年、六三頁。

(22)矢田津世子「女人芸術名古屋講演記」、『女人芸術』、一九三〇年三月号、一九一頁。

(23)堺利彦「私の見た婦人闘士」、『婦人公論』、一九三〇年一二月号＝「私の見た婦人闘士」、鈴木裕子編『堺利彦女性論集』、三一書房、一九八三年、三六三頁。

(24)平塚らいてう「昭和婦人解放運動史――太平洋戦争に突入するまで」、『女性改造』、一九五一年五月八日号＝平塚らいてう著作集編集委員会編『平塚らいてう著作集　第七巻』、大月書店、一九八四年、一六八頁。

(25)「昭和八年中ニ於ケル社会運動ノ状況」、全逓信労働組合全逓史編纂委員会編『全逓労働運動資料　第二〇集』、一九六一年、四三頁。

(26)鈴木裕子編『日本女性運動資料集成　別巻　日本女性運動史人名事典』、不二出版、一九九八年、二〇七頁。

(27)松村が去ってから二年後、かの有名な阿部定が徳栄楼で働き始めている。訊問調書のなかで阿部は、楼主について「酒に酔うと私に『セキセイ』（楼主のつけた阿部のあだ名――引用注）を呼べと云っては呼び付け、叱る様なことを云いました。私はそれでも負けて居らずぽんぽん云ってやり、却って主人は、私に負けてしまいました」（第二回訊問。原文カナ。伊能秀明「資料　阿部定の訊問調書」、『明治大学博物館研究報告』、第九号、二〇〇四年、一二頁）と証言している。松村逃走後に楼主が変わっている可能性もあるが阿部の証言から浮かぶ人物像は「地獄の反逆者」で描かれた楼主木浦と非常によく似ている。ちなみに調書によると阿部も同楼から逃走するが失敗して連れ戻されている。実際には当時の警保局長は松村義一である。

(28)山家悠平前掲書、八六頁参照。

(29)ただし、松村が想定していた読み手としての娼妓たちは、松村のような高学歴女性ではなかっただろう。実際に「地獄の反逆者」で描き出される、ものを読むことができる娼妓たちが読んでいるのは講談本や小説であって、歌子のほかに『婦人新報』や『婦女界』を読む娼妓はいないのである。詳しくは、山家悠平「ものを読む娼妓たち――森光子と松村喬子の作品に描かれる『読書』を中心に」、『女性学年報』、第三八号、二〇一七年、八九―九一頁参照。

(30)詳しくは山家悠平前掲書、一二八―一三八頁、一九四、一九五頁を参照。

(31)たとえば大阪松島遊廓金宝来の一九三一年一一月のストライキの要求事項には「明細書と花代の改善および毎日それを娼妓に示して捺印さすこと」「病気の時は早く医者の手当をうけさすこと」（山家悠平前掲書、一九四頁）という項目がある。

(32)『女人芸術』、一九二九年六月号、九九頁。

(33)八木秋子「編集後記」、『女人芸術』、一九二九年四月号、一五六頁。

(34)「公娼より廃娼運動へ――自廃した松村喬子さんを訪う――」、『婦女新聞』、一九二八年一月二二日。

(35)

Strong Women in the Red-Light District:

The Experiences of Life in a Brothel Depicted in Matsumura Koyoko's Jigoku no Hangyakusha (1929)

YAMBE Yuhei

In the beginning of Jigoku no Hangyakusha (A Rebel in Hell), Utako, the main character of the novel, is questioning herself about the many problems of the brothel: exploitation by the owner, the rule of unquestioning obedience by the sex workers, etc. Then she starts to imagine the faces of her colleagues and thinks about who should she consult with.

Jigoku no Hangyakusha, serial novel written by Matsumura Kyōko (?-1993)., was published in "Nyonin Geijutsu" (Womens' Art) from April to September, 1929. While the anti-prostitution movement and the labor movement were growing in the late 1920s, Matsumura escaped from a brothel in Nagoya and later became an activist in the labor movement.

The novel was based on Matsumura's own personal experience, however, in contrast with other sex workers' memoirs at that time, such as Mori Mitsuko's famous memoir Kōmyō ni Megumu-hi Hatsumise kara Dasshutsu made (1926), Matsumura did not use the first person pronoun to depict her experience. Instead she created the main character Utako, and the novel is written from Utako's point of view. Utako actively asked colleagues to unite to improve working conditions. Jigoku no Hangyakusha was not only a historical testimony of a sex worker but also an interesting and imaginative narrative about resistance and solidarity among sex workers.

Although Jigoku no Hangyakusha is one of the first novels in modern Japan about brothels written by a sex worker, it has not received much attention from Women's Studies scholars in Japan until recently. Thus, focusing on the novel Jigoku no Hangyakusha, this paper explores what Matsumura was aiming to express through writing the novel. I will also consider what the significance was for Matsumura to re-tell her stories of life in the brothel from Utako's point of view.